

なんばウォーク（虹のまち商店街振興組合）
事務局長 西村 実さんのスタディツアー参加感想

「モンゴルスタディツアーに参加して」

日本救援衣料センター（JRCC）からお誘いをいただき、7月に企画されたモンゴル及び南ゴビのスタディツアーに参加しました。勤務先である大阪ミナミの繁華街に所在する約250店舗から構成の地下街“なんばウォーク”による毎年1回のキャンペーン「あなたの古着を世界に届けよう！」が縁となって、JRCCとご交際が始まり今年で10年。過去9回の累計では京阪神一円のご家庭や職場から約68,500名様がお越しになられ218トン・推定で80万着の衣類が持ち込まれるなど、季節の変わり目になると開催時期の問い合わせが少なくない恒例催事に成長しています。

こうした経緯からのお誘いは誠にありがたいものでしたが、又8日間の旅程は数ヶ月前から予告があったものの、職責から離席が容易ではありませんでした。これを克服したものは正直いって、未だ見ぬモンゴル、とりわけゴビ砂漠を目の当たりにしたいという一念でした。

首都ウランバートルに到着して翌日市内を半日観光ののち、約2時間をかけて南ゴビ空港に着陸。タラップから降りた瞬間、滑走路に臨む周囲の景観に息を呑みました。夕刻とは思えぬ青空の下、何処までも果てしなく続く乾いた大地。広い、ただただ広い。

アクシデントでその日の宿泊ゲルが変更となり、悪路に身体を始終揺さぶられながら更に5時間かけマイクロバスを駆って走破した深夜のゴビ砂漠。復路で改めて車窓から眺めた灼熱の日射しにゆらめくゴビ砂漠。昼食で休憩した丘陵から見渡す悠々のゴビ砂漠。目蓋を閉じれば今でも鮮やかによみがえります。

ゴビ砂漠の宿泊に用いたゲルは、用便で多少の不自由があったものの、思いのほか快適でした。早朝5時過ぎから起床して空を見上げると十五夜間近な月がほのかに浮かび、程なく反対の方角の砂丘からは太陽が顔を見せ瞬く間に強烈な橙色の全容となってズンズン上ってくるのでした。無音の荒野で至福の小一時間を独占しました。などなど、語るのが止らぬくらいのゴビ砂漠における感動に、今回の企画がJRCCの計画されたスタディツアーであることを、失念するところでした。

南ゴビから首都への帰路で立ち寄った遊牧民ゲル、モンゴル日本人材開発センター、モンゴル日本白樺協会、国立孤児院、国立子供芸術センター、地域公民館、及び在モンゴル日本大使館などが、今回のスケジュールには当然とはいえ予め組み込まれていました。そのどれもが一般の観光旅行では決して訪れることのない施設にちがいません。ましてや、到着の待ち望まれていたのが明らかに伺える先々での歓待及び現地関係者による厚遇は、設立25周年を一昨年迎えられたJRCCの積年の実績に負うものであり、大いに敬意を表したいと存じます。

衣類はどの施設でも、関係スタッフの進行に従い、JRCC及び当該施設の代表者による挨拶などののち、参会の一人ひとりに贈呈されました。訪問先によって、老若男女、学童、幼児、と種々の顔に出会いました。自分のカメラをひとに託し現地の方々と肩を並べた写真撮影も盛んでした。が、自分は終始控えておきました。記録は必要不可欠であっても、個人の記念や思い出づくりはこの種の活動において自制しておきたいという拘りからです。自分以外に、強いるつもりはありませんが。

モンゴルにおいて救援衣料は首都周辺に居住する貧窮階層及び遊牧民の一部から必要とされているように見受けられますが、実際はどうなのでしょう。諸施設を駆け足で巡回しながら、贈呈を行う際には現地関係者及び受給者との対話の時間をもっと確保していただければ、と強く感じました。本当に必要なひとに、必要なとき、必要なだけ、がどのようにすれば届くのか。こうした機会に運営の当事者だけでなく、手を差し伸べる者と受給者が忌憚らない意見を開陳することで双方の理解と交流がより深まるように思います。

いつなんどき天変地異によって今日の繁栄が困苦の底に沈むかも分からず、また世界には貧窮の日々を送る人々が確実に存在する以上、衣食住のうち“衣”の補完に特化しているものの、JRCCの活動は今後も永く必要とされるに相違ありません。

日本救援衣料センターには幾久しく益々ご発展されますよう、衷心よりお祈り申し上げる次第です。